

## おわりに

最後まで読んでいただきありがとうございました。本書は公衆衛生のエッセンス、特に重要性やおもしろさの上清み部分だけを抽出した本になるように執筆しました。

どのような学問、趣味もそうですが、本来は学びはじめが一番楽しいはずなのです。本書で公衆衛生のおもしろさを肌で感じてもらえれば、私の意図は達成できたこととなります。筆者として、これほど嬉しいことはありません。

さて本書は公衆衛生全体についての書籍になっていますが、私自身は、公衆衛生のなかでも産業医学の分野が専門です。そこで少しか産業医学の話を見せてください。

産業医学の分野のおもしろさの醍醐味というのは、なんといっても「日本の経済活動に直接携わっている」感じや「世界とつながっている」感じです。病院では得難い「会社を治療する経験」を、産業医学の分野に携わっていると得ることができます。会社を治療する分野が集団として機能すると、結果として日本全体の経済活動が治療されていくことになり、日本の国際的なプレゼンスが高まると信じて日々仕事をしています。私は人が行う経済活動や経営に関する分野に興味があるので、この産業医学はたいへんおもしろい分野であると思っていますし、自分にとってもあった仕事だと考えています。

そして、産業医学を専門とするようになって、学ぶことも臨床の先生方とは大分異なってくるようになりました。『ハリソン内科学』も仕事をするうえで知識として当然に重要ですが、それ以上に、法律の知

識、過去の裁判の記録（判例）、基本的な経済学、経営学、組織論、心理学、世界経済、世界情勢などの知識が重要になってきます。

産業医学の現場というのは、多くの場合、職場に1人しかいない専門家になるわけですから、どの階層の人ともある程度話ができなくてはいけません。ですから、経営層の方々と話すときは経営の知識、人事労務の方々と話すときは組織の知識、病気で困っている方と離すときは医学の知識、新卒採用の方と話すときは就職活動の知識、などなど必要な知識には枚挙に暇がありません。ときには弁護士や社労士の先生方とお話をすることもあります。そのときには法律の知識が重要になってきます。勉強することが多くてたいへんそうと思うかもしれませんが、それは臨床に行っても同じですから、何を学びたいか、何をしたいか、で進路を選ぶとよいのではないかと思います。

会社のなかで経営者から新卒の新人まで幅広く話をする機会がある職業というのは私の知る限りほとんどないですし、この仕事は医師や看護師・保健師という資格をもっていないとできない仕事です。興味がある人は、近くの産業医学の先生に直接話しを聞きに行くとよいでしょう。きっといろいろと教えてくださるはずです。

そしてこれは私の想像ですが、公衆衛生のなかでも他分野、例えばWHOに勤めたいと思っている方はきっと「世界を治したい」と思っているのだと思いますし、保健所に勤めたいと思っている方は「地域の健康を増進したい」と思っているのだと思います。それぞれとても素晴らしい仕事だと思います。

加えて、新型コロナウイルス感染症の話でも少し述べましたが、それぞれの分野は独立して存在している学問領域では決してありません。世界は国と、国は地域と、地域は人とつながっているように、公衆衛生の分野も、例えば母子保健と産業保健だっつながっていますし、各分野は（今はまだみえないかもしれませんが）しっかりとつながっています。もちろん公衆衛生と臨床医学の分野もつながっています。すべてのことを「将来自分には関係ない」と思わず「いつか役に立つだろう」と考え勉強するとよいでしょう。

ぜひ、公衆衛生を学ぶことで、どのようにして日本の健康は守られているのかを学んでください。

最後にくり返しになりますが、本書は初学者向けに重要な部分だけを抽出した本です。そこで、この本に自分なりの注釈やメモをたくさん書いてください。そうすることによって、自分に最もあった自分の教科書ができるはずです。

そうしたうえで、改めて教科書や成書にあたってみてください。はじめて読んだときとは違う景色がそこにはあるはずです。

そして、これは私の持論ですが、教科書は初学者向きではありません。この本を、教科書を使って自分で学びはじめるための「フック」にしてもらえれば幸いです。

本書作成にあたって、羊土社の久本容子様、吉田雅博様には全体の編集・校正などのすべてにおいて、鳥山拓朗様には読者の皆様が読みやすくなるような紙面デザインの作成において、たいへんお世話にな

りました。ヨギトモコ様には文章が記憶として残りやすくなるような挿絵を描いていただきました。tobufuneの小口翔平様、三沢稜様には思わず手にとってみたくなるような素敵な装幀デザインをしていただきました。三報社印刷様には印刷を含めて原稿を本の形にさせていただきました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

また、本書を最後まで執筆できたのはひとえに妻の舞紀の支え、そしてアドバイスがあつてのものでした。私の心が折れそうになったときに精神的に支えてくれたのは娘のさくらでした。妹の紗瑛は私が大変なときにいつもそっと支えてくれました。そして私を含めた家族のことをいつもワン以外何も言わずに支えてくれたのは、ミルクとモモです。この場を借りて、心からの感謝を申し上げます。

何よりここまで書き上げることができたのは、これまでご指導してくださった多くの先生方のおかげです。心より感謝申し上げます。

そして、本書は皆様が手にとってくださった瞬間に完成します。本書を完成させてくださる皆様に心より感謝申し上げます。

2021年2月

平井康仁